

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 和歌の研究と電子資料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: スピアーズ, スコット, Spears, Scott メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000277

和歌の研究と電子資料

スピアーズ スコット

和歌研究では、かなり以前から、電子資料が研究活動の中で重要な位置を占めるようになり、今後ともその重要性が増す一方だろう。特に画期的だったのは古典和歌の集大成である『新編国歌大観』本編全十巻（角川書店）のデータベース化（電子化）だった。このデータベースは当初、CD-ROMで提供されていたが、現在、いくつもの提供先よりオンラインで使用可能となった（現在は古典ライブラリー社提供日本文学Web図書及びネットアドバンス社提供ジャパンレッジ）。和歌以外にも、様々な古典文学資料が電子化・データベース化されている。

データベースの使い方を考えた場合、様々な検索方法があるかと思うが、自分の使い方としては、数種類にとどまっていることに気が付く。一つは、同一歌が他にとの資料（歌集、歌論等）に採用されているのかという、単純な一致検索だ。「てにをは」や漢字・仮名の異同等に留意しながら検索すれば、同一歌をデータベースが収録する資料の中からすべて見つけることができる。次は単語や語句の用例検索だ。特定の言葉を検索すること自体は容易なのだが、検出される数多い用例の中から代表的なものを選別と検討には人間の目が入る必要があり、最終的にはかなり時間がかかる作業になる。最後には人名検索だ。資料によって人名の表記が異なるのはよくあることで、同じ人でもいくつもの異称で調べる必要があるが、検索自体は瞬時にできる。

以上のような使い方は、従来の研究では、紙媒体資料を使って行っていたようなことを、ただコンピューターにさせているに過ぎないともいえる。作業の手間が省けるという意味では電子資料の存在は大変ありがたいと思う。しかし、電子資料であるがために、より多くの可能性があるだろう。

人物についていえば、人間関係が大変重要である。そして人間関係といえ、現在ではSNSがよく話題にされる。多くのSNSでは、ユーザー同士の関係をグラフというもので分析することがある。混同しやすい名前だが、ここでいうグラフとは、数値を図に表したのではなく、情報理論等の世界で用いられるやや特殊なものだ。このグラフは、様々な点と点を線で結ぶことで出来上がる、複雑な路線図のようなものだ。その「点」が表すのは、SNSの場合だと、ユーザーになる。一人のユーザーが別のユーザーの「友達」になると、グラフの上ではこの二者を線で結び、「友達」関係を示す。一人のユーザーが多数のユーザーとつながり、そして複数のユーザーがさらに複数のユーザーとつながっていく。できあがるグラフを用いて、人間関係を様々な角度から分析することができるという。

同様の方法を和歌文学研究に適用はできないのだろうか。例えば、とある歌人が和歌資料の上ではどこに登場して誰と関係があるのかについて、データベースを使用して探ることが可能だ。その人と歌会・歌合等に同席した人物を検出すれば、SNSと似たように、歌人同士の人間関係に基づいてグラフを作り、様々な角度からその関係を検討することができるだろう。和歌資料に加え、段々と電子化されてきている歴史資料を検索に加えていくと、より包括的な検討が可能になるだろう。

このような分析は当然思いつくもので、自分独自の発想だとは全く思わない。おそらくこのような研究がどこかですでに進行中だろう。その成果が出ることを大いに期待している。一方で、このような研究は必ずしも「新しい」ともいえない。先学諸氏は長年、現在のような電子ツールに頼らなくても、諸資料から歌人の人物像を描き上げてきたし、人間関係もその重要な一面だった。ただ、新しいツールを駆使することで、これまでに見えてこなかった側面も浮かび上がってくるだろう。それを明らかにしていくことが歌人研究に新しい風を吹き込ませることになるだろう。

(日本中世文学(和歌文学))